

「秋田杉についてのお話」

秋田材担当：

株式会社毛塚商店

毛塚 峰彰

① 特徴

数多くの杉の中で、なぜ秋田杉が日本三大美林としてもはやされているのでしょうか？他の杉にはない特徴があるからです。

秋田杉が繁茂する県内の杉林は直接日光の入らない林が多いため、林内のいたるところに幼稚樹が見られます。日光の入らない原始林で成長してきた秋田杉はそれだけに強度の耐陰性を持っているといえます。

針葉樹の繁殖には「伏条」と「立条実生（みおい）」とがあります。伏条繁殖とは親木から出た下枝が地面を伏すように這い、そのうち落土などで土をかぶり、その枝から根が出て親木から2～3m先で垂直に立ち上がり成長することを言います。立条実生とは、種子から発育することです。

ほかの地方の杉に比べ若い時期の成長は遅いですが、老木になっても同じ程度の成長を続けます。秋田杉ならではの木目がそろった木材が生産されるのは成長に持続性があるためです。長寿で巨木なので節のない幅広材が取れます。繊維通直、狂いが少なく工作が容易です。

秋田杉の材色（木の中心の色、心材ともいう）は明るく澄んだ肉色が最上とされています。木目は細かく幅が大体そろっているものがいいとされますが、部分的に木目の幅が広かったり狭かったりするものが普通で、極端に細かい木目はよいとは言えません。全体的に木目の幅が広いうえ、そろっていないものは劣等材と言われ、節が多いほど劣等度も増します。香りの点では、鼻を衝く清純爽快な感じを受けるのがいいとされています。



天然秋田杉

出典：東北森林管理局

<http://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/index.html>



一本木取り、目揃い赤無地

写真提供：毛塚商店

② 変遷

今から約1300年前(西暦733年)東北地方がまだエゾ地と呼ばれていたころ秋田杉は秋田の各地に原生のまま繁茂し、大森林をなしていました。大和朝廷が東北を支配下に置こうと、エゾ地開拓を進めようとしたが、何度かエゾの抵抗にあい血みどろの戦いを繰り返しました。こうした争いの中で、大和の軍勢は秋田杉を柵や築城に利用したのが活用の始まりとされます。

文禄2年(1594年)豊臣秀吉が伏見城を築くため全国に密偵を飛ばし、建築用の良材を調査した折、秋田杉に白羽の矢が立てられました。切出した杉の大木は米代川を筏で能代まで流し、能代港から大船で大阪に積み出されました。

慶長5年(1600年)関ヶ原の戦いの後、徳川政権では諸大名の整理が断行され、藩主、秋田誠之助実季は常陸の宍戸に左遷され、代わりに常陸の佐竹義宣が徳川方に協力しなかったという理由で秋田への国替えを命ぜられました。裕福な常陸の国から貧しい未開の地秋田に左遷させられてきた佐竹義宣は、藩財政の立て直しを図るため、鉱山の活用と豊富な森林資源の開発に着手しました。海路越中、その他の遠国に移出し、藩財政を潤しました。

このような政策を陰で支えたのが「国の宝は山なり、然れども伐り尽くす時は用に立たず、尽きざる以前に備えを立つべし、山の衰えは即ち国の衰えなり」と名言を残している家老「洪江内膳政光」でした。森林開発に関しても種々の対策を打ち出し、眠っていた秋田の天然資源の目をさましました。米代川上流随一の美林の杉材を大量に切り出し海路敦賀に輸送、大阪市場への大量移出が始まりました。森林資源の豊かさに目をつけられ、幕府の江戸城増築をはじめことあるごとに運上方を頼まれました。他領への移出、鉱山の開発が進むにつれ秋田杉をはじめとする森林の荒廃ぶりが激しさを増していましたが、藩政を賄う為に伐り倒されていく木々をむなしい思いで見つめるしかありませんでした。

藩政が義宣から二代目義隆に代わってもこの傾向は続きました。これまでは日本海回りだけだった海運も太平洋航路が開け直接江戸に運ばれるようになり、空前の活況をみせるようになりました。またこの景況に拍車をかけたのが江戸の大火です。復興のため膨大な秋田杉が江戸へと送り込まれました。

義隆は「御礼山」と「御留山」という秋田藩初期の林政のさきがけともなる新しい制度を打ち出しました。「御礼山」とは針葉樹、潤葉樹を問わず、それぞれの必要に応じて森林の育成を図るため藩が制札を交付、樹木の伐採を一切禁止する山のことです。「御留山」とは豊富な杉を藩が独占的に利用し農民たちの自由な伐採を禁止することです。しかしこの制度は資源を減らさないというだけの消極的な制度でしかありませんでした。依然として杉林の荒廃は日に日に激しさを増していました。

佐竹藩四代目義格の時代になって、二十五箇条からなる「林取立役定書」と呼ばれる森林保護の訓令を発しました。いかにして植林を促進するかにありましたが、数十年後でなければ自分達の労力に報われるものが回収できない植林に精を出す人も少なく、目立った効果をあげることはできませんでした。その後も藩の財政はますますピンチになりました。当然めぼしい杉木は伐採され、また各地で盗伐も横行しました。藩政は八代藩主義敦に引き継がれていました。秋田杉はこれまでの三分の一にまで減り、財政は火の車、本当にひどい状態でした。

天明5年(1785年)義敦が江戸で没し、義和が後を継ぎました。「今、杉の苗を植えても茂木になるまでには少なくとも四、五十年後。急場の救いにはならぬ。しかし目先のことのみにとらわれていては、当藩百年の大計はならぬ。余の代に役立たずともいつか”国の宝“となるときがくる」と山林荒廃の原因をさぐり植林のすすめと林政機構を整備しました。これまで杉などの収入は藩と農民で折半していましたが、藩三割、農民七割という大英断を下しました。

改革を陰で支えたのが「秋田杉の父」と呼ばれる林取立役賀籐景林でした。藩内の山々を見回り、植樹、森林保護に寝食を忘れ働き、巡視した体験に基づいて企画、立案を打ち出し、天保5年(1834年)66歳で没するまで、木山方として景林が植樹したものは実に250万本に達したと伝えられています。景林の意思は長男景琴が引き継ぎ賀籐景林父子二代にわたる努力が“秋田美林”の基礎を確立しました。そして彼らの後ろには名もなき多くの農民の努力があったことはいまでもありません。

明治4年(1871年)廃藩置県が布告され秋田藩は秋田県と改称されました。政変の混乱などにより乱伐、盗伐が横行し秋田杉の蓄積量は目に見えて減少していきました。その後、藩有だった山林はすべて国有になり林政も急テンポで進められる一方、住民の抵抗も起こりました。そこには「山は自分たちのもの」という意識が強かったのです。藩有林といえども実際に植林し、管理してきたのは農民であり、藩もまた農民に山林を利用する権利を認めていました。当時の秋田県内の山林原野80万ヘクタールのうち66万ヘクタールが国有林に編入されました。そして農民たちの心は山林から離れていきました。「もう山は自分たちのものではない」。農民の植林意識は消え、農民に見放された山林は次第に衰えていきました。事態を重く見た県では、市町村もしくは部落または組合において一区域の地に杉、檜、松などの1カ年に5,000本以上を植えたときは奨励金を出すという制度を制定しました。その結果県内いたるところに植林意欲が盛り上がりました。県はさらに、学校植林、部落植林と指導を進めていきました。そして県行植林にまで拡大させることになりました。

③ 秋田杉の危機

大正から昭和にかけて経済情勢が窮迫してくると、国有林では皆伐主義か択伐主義かが国有林経営の大きな争点になっていました。択伐論は伐採に適した木だけ選んで切る方法で、木の天然更新産業を大切にしようというもので、皆伐論は一定面積の木をすべて伐採し、跡地に植林して人工林を造成しようとする方法です。これらは幾度も論議され、結局択伐論が採択されました。しかし、国土保全を目的とした択伐主義も緊迫した時代の動きには勝てませんでした。

昭和の初め、国全体が戦争へとひた走る中、次第に林業の戦時統制が強化され、秋田杉が軍需用材として真っ先に目をつけられました。増伐、増伐で山は荒れ放題、植林は完全に忘れられ、ついには保安林までも増伐されました。戦争が終わったころには「国の宝は山なり」と藩政時代から県民が長い間大切に守り続けてきた秋田杉は見る影もありませんでした。

④ 木都能代

国有林の秋田杉の払い下げは明治中頃まで秋田大林区署によって行われましたが、大部分は立木のまま山師と呼ばれる民間業者に売り渡されていました。彼らは杣夫(そまふ)、人夫を使って杉を

伐採し、貯木場まで運んできて材木問屋に売り渡していました。

明治23年、東京深川の有力な材木問屋、久次米商店と土木会社・大倉組が共同出資で林産商會を設立。能代に進出するまで、県内には近代的な製材工場はありませんでした。林産商會にはすぐれた企業手腕の持ち主がいました。能代支店長になった「井坂直幹」当時31歳。1860年に茨城県に生まれ、水戸国学を学びました。明治維新後、福沢諭吉の書生となり慶応義塾に学び、西洋文明と福沢諭吉の合理主義を十分身につけました。井坂は機械製材に目をつけました。しかし木材界に飛び込んだばかりの新参者には業界の実情も十分わからず、いきなり機械工場を建設するのは無理でした。それに久次米商會東京本店が経営不振に陥り、材木問屋を閉鎖することになりました。それでも井坂は木材業界に強い魅力をいだき始めていたため本店閉鎖後も能代に残り、資金を集め能代材木合資会社を設立しました。

彼は藩政時代から残っていた“山師”による伐木運材をやめ、木材払い下げと製材を直結させ“山師”と完全に手を切りました。さらに長年の望みであった機械製材工場を設立、イギリスから新式の製材機を購入しました。井坂の事業は軌道に乗り明治34年には秋田製材合資会社を設立。製品は飛ぶように売れ従来の北海道、北陸地方だけでなく関東、関西にまで販路を拡張、秋田杉製品の声価を高めました。明治41年にはこれらの会社を合同、秋田木材株式会社が発足しました。本県の「木材王国」としての地位を確立しました。まさに「木都能代」の生みの親と言えるでしょう。

このように米代川流域は、秋田杉で栄えた街です。明治後半から大正初期にかけての景気は最高潮に達しました。

昭和33年に「国有林生産力増強計画」として秋田杉を20年間で皆伐し、人工林に移行する計画を立てました。年間の出材量は、昭和35年以降50万 m^3 、53年10万 m^3 、54年8万 m^3 、55年以降5～6万 m^3 、平成10年でゼロにする予定でした。しかし秋田杉を生活の糧にしていた製材所は死活問題になると反発し、昭和53年に「長期伐採計画」で見直し、延命策を図りました。平成19年まで3千 m^3 になり平成24年までの2千 m^3 で終了予定となるものでした。出材が終わってしまった今、「杉材産地秋田を支えてきた製材工場が多い米代川流域」の盛衰は激しく、今、業界は体質改善に全力をあげて戦っています。

注：これまでに話ししてきた「秋田杉」とは天然秋田杉(官木)を指します。昭和の時代、天然秋田杉が減少して来た頃、秋田杉(民木)と区別する為に、呼び方を変えました。